Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-05-12

「根本の問い」と形而上学的ニヒリズム : 無は可能世界のひとつか？

丸山, 栄治

(Citation)
愛知 : φιλοσοφια,26:112-126

(Issue Date)
2014-11-28

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81010331

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81010331

「根本の問い」と形而上学的ニヒリズム

——無は可能世界のひとつか？

丸山 栄治

序 「根本の問い」における「何もない」

「なぜあるものがあって何もないのではないのか。(Why is there something rather than nothing?)」ライプニッツに由来するとされるこの問い（本稿ではこの問いを「根本の問い（the fundamental question）」と呼ぶ）を考察するとき、ここで存在に対比されている「何もない」ということが可能なのかということがしばしば論点にされる[(1)]。本稿が取り上げる「形而上学的ニヒリズム（Metaphysical Nihilism）」も、分析的形而上学における「根本の問い」をめぐる議論の中で問題にされるようになった[(2)]。形而上学的ニヒリズムとは「具体的対象が存在しない可能世界が現実世界から到達可能である」という主張、あるいは、その主張を支持する立場のことである[(3)]。この立場の正当性に関する議論が、「無は可能か」という問いに答えを出すと考えられているのである。しかし、「根本の問い」における「無」の可能性の問題を、可能世界の存在の是非として扱うことができるのだろうか。本稿は、形而上学的ニヒリズムをめぐる議論がもついくつかの前提を把握し、その中で最も基本的な前提となっている「具体的対象が存在しない可能世界」として「無」を扱うということについて、その問題点を指摘したい。以下では、まず形而上学的ニヒリズムが問題にされるようになった経緯から確認する。

周知のように、可能世界という概念は必然性や可能性といった様相概念を分析するために導入されたものである。この可能世界という着想のもとでは、例えば、「ある事柄が必然的に真である」は「すべての可能世界においてある事柄が真である」と言い換えられ、必然性や可能性といった様相を含む文の真理値は、可能世界のすべてに対する量化によって規定される[(4)]。この可能世界という着想をもとにすれば、「根本の問い」は次のように言い換えられる。「現実世界を含むあらゆる可能世界の中には何も存在しない空虚な世界というものも存在する。このとき、なぜ現実世界は空虚な世界なのではなく、空虚ではない世界であるのか。」こうした言い換えを採用してい

ると考えられるのが、ピーター・ヴァン・インワーゲンの論文「そもそもなぜ何かがあるのか（Why is There Anything at All?）」である。この論文の中でインワーゲンは、「空虚な世界」を「具体的対象が存在しない可能世界」とし、そうした世界が現実世界になる確率が極めて低いことを示すことで「根本の問い」に答えようとする[(5)]。インワーゲンの提案に対し、ジョナサン・ロウは、「根本の問い」における「無」を「具体的対象が存在しない可能世界」とするインワーゲンの想定については認めつつ、しかし、そのような可能世界の存在を認めない。というのも、ロウによれば、抽象的対象の存在は具体的対象の存在に依存し、抽象的対象はあらゆる可能世界に存在するため、具体的対象もまたどの可能世界にも存在すると考えるからである[(6)]。

インワーゲンやロウのような「具体的対象が存在しない可能世界」の存在に対する否定的な立場、すなわち、この意味での無はほとんど起こりそうにないか、あるいは、全く不可能であるとする主張に反対して立てられたのが、ボールドウィンの引き算論法（Subtraction Argument）である[(7)]。引き算論法とは名前の通り、現実世界から到達可能な世界の中には、現実世界を構成している具体的対象をひとつひとつ差し引いた世界が存在し、そして、具体的対象が全く存在しない世界もまた存在するということを証明しようとしたものである。その後、この引き算論法の前提の正当性や論証の妥当性が議論されるようになり、このことが形而上学的ニヒリズムをめぐる議論の発端となった。この議論において、例えば、コギンズは、引き算論法が失敗し、具体的対象が全く存在しないことが不可能であることを示すことによって、「根本の問い」に決定的な答えを与えると主張している[(8)]。

以上の「根本の問い」から形而上学的ニヒリズムへの一連の議論の流れにおいて、「具体的対象が存在しない可能世界」について考察されるべき事柄として、段階的に次の三つの問いを考えることができる。

(a) 「根本の問い」における「何もない」は「具体的対象が存在しない可能世界」か。
(b) 「具体的対象が存在しない可能世界」は存在するか。
(c) 「具体的対象が存在しない可能世界」は現実世界から到達可能か。

本稿はこの三つの問いから形而上学的ニヒリズムをめぐる議論において前提とな

っている事柄を把握する。本稿１節では、(c)の問いに対して「到達可能である」という答えを与えようとする引き算論法がもつ前提と論証のプロセスを確認する。この引き算論法を正当化するためには、この論法が明示する前提だけでなく、到達可能な関係をもつとされる「具体的対象が存在しない可能世界」が、可能世界の定義に適うものとして存在することが前提されなければならない。そこで、本稿２節では、この点を問う(b)の問いについて、可能世界のいくつかの捉え方と「具体的対象が存在しない可能世界」の存在の是非との対応関係を、コギンズの分類に依拠しつつ整理する。最後に３節において、(a)の問いについて考察する。(b)や(c)の問いは(a)の問いに対して肯定的に答えられることを前提にしている。ここでは、この点について重要な指摘をしていると考えられるハイルの論文「偶然性（Contingency）」における無の理解を取り上げ、無の可能性をある可能世界の存在の是非として論じることに伴う問題を、２節で整理した可能世界の分類と合わせて検討する。

1. 引き算論法

ボールドウィンは「具体的対象が一切存在しないということが可能である」ということが現実世界で真であることを示すため、次の引き算論法を提示する[(9)]。前提は次の３つである。

(A1) 具体的対象が有限個の領域をもつ可能世界が存在するかもしれない。

(A2) その可能世界に含まれる各々の具体的対象は存在しないかもしれない。

(A3) これらのどの具体的対象の非存在も、別の具体的対象の存在を必然化しない。

これらの具体的対象に関する３つの前提から、引き算論法は次のプロセスで結論にいたる。

(1) （A1）より、現実世界 W から到達可能な具体的対象が有限個ある領域をもつ可能世界 w_1 が存在する。

(2) （A2）より、w_1 から到達可能な次のような世界 w_2 が存在する。w_2 は、w_1 の領域の任意の具体的対象 x_1 が存在せず、そして x_1 が存在しないことで存在しなくなるような他の具体的対象のすべても存在しない世界であり、それ以外は w_1 と全く同じような世界

である。

(3) （A3）より、w_2の領域はw_1において存在しないものを含まないので、w_2の領域はw_1より小さい。

(4) w_1からw_2を得る引き算のこの手続きを、次のような可能世界w_{min}に到達するまで反復する。w_{min}は、それが存在しないことによって領域の具体的対象のすべてが存在しなくなるような一つ以上の具体的対象からなる領域をもった世界である。

(5) （A2）より、これらの具体的対象のうちのひとつの非存在が可能であるので、w_{min}の領域のすべての具体的対象が存在しないw_{nil}が存在する。

(6) （A3）より、w_{min}の領域のすべての具体的対象の非存在は、他の具体的対象の存在を必然化しないので、w_{nil}は具体的対象が一切存在しない世界である。

まず論証の前半である(1)〜(3)の記述に注目しよう。ここでは、可能世界w_1から到達可能であり、かつ、可能世界w_1に含まれるある具体的対象x_1が存在しないような可能世界w_2が存在することが示される手続き、いわば最初の一回分の引き算の手続きが示されている。(2)の記述の内にみられる「x_1が存在しないだけではなく、x_1が存在しないことで存在しなくなるような他の具体的対象のすべてもw_2には存在しない」とは、次のような例を考えることができる。w_1にはあるメガネαとそのαの部分であるレンズβが存在するとする。このとき、このメガネαがw_2で存在しなければ、αの部分であるレンズβもw_2では存在しなくなる。そのため、一回分の引き算の手続きで、αだけでなくその部分βも存在しないようなw_2が得られる。前提(A3)より、ある具体的対象の非存在が別の具体的対象の存在を必然化することはないため、引き算される前の世界と後の世界では後者の方がその領域が小さくなる。このような引き算の手続きをw_{min}に至るまで繰り返すのである。

そして、論証の後半である(4)〜(6)は、最後の引き算の手続き、すなわち、w_{min}から具体的対象が一切存在しない世界w_{nil}を得る手続きが示されている。この最後の引き算の手続きは、消去される具体的対象について、先程みた引き算の手続きとは若干異なった規定がなされている。上記で確認した(2)では「x_1が存在しないだけではなく、x_1が存在しないことで存在しなくなるような他の具体的対象のすべてもw_2には存在しない」とされていた。一方最後の引き算の手続きにおいて(4)ではw_{min}の領域は「それが存在しないことによって領域全体の具体的対象のすべてが存在しなくなるよう

な一つ以上の具体的対象からなる」とある。これは、w_{min} から到達可能であり、かつ、w_{min} に含まれるいずれかの具体的対象が存在しない世界は、必ず w_{min} に含まれている具体的対象が一切存在しない（したがって、具体的対象を一切含まない）w_{nil} であることを示している。したがって、(4)の w_{min} に関する規定は、w_{min} から w_{nil} への到達が最後の引き算の手続きとなるように設定されたものである。

ボールドウィンによれば、世界間の到達可能性関係が推移的であれば、現実世界から w_{nil} に到達可能である[10]。すなわち、推移的な到達可能性関係をRとすれば、WRw_1、かつ、w_1Rw_2、かつ、・・・、かつ、$w_{min}Rw_{nil}$ であり、すなわち、WRw_{nil} となる。したがって、「具体的対象が一切存在しないことが可能である」は現実世界で真であると帰結される。

ボールドウィンの引き算論法は、具体的対象が一切存在しないことが可能であるということが現実世界において真であるかどうかを問題にする際に、この論法の三つの前提と具体的対象の定義との関連、論証そのものの妥当性などを論じる必要性を明示することになり、その後それぞれの論点について様々な見解が提出されてきた[11]。しかし、本稿1節で述べたように、引き算論法を正当化するためには、引き算論法とは独立に、そもそも「具体的対象が存在しない世界」が存在すること、それが可能世界のひとつであることを示さなければならない。というのも、可能世界の捉え方によっては、「具体的対象が存在しない世界」は可能世界とは認められず、その場合、引き算の手続きは w_{min} でストップするからである。引き算論法は、「具体的対象が存在しない世界」が可能世界として認められたことを前提に、それが現実世界から到達可能な諸世界の一つであることを示すものなのである。では可能世界をどのように捉えれば、「具体的対象が存在しない世界」を可能世界のひとつと認めることができるのか。

2. 形而上学的ニヒリズムと可能世界

可能世界とは何かということについては様々な見解が提示されてきた[12]。たとえば、可能主義では、現実世界が存在するのと同じように他の可能世界も実際に存在し、現実性は各々の世界において指標的なものである。一方、現実主義では、現実に存在するのは現実世界のみであり、可能世界は現実世界において存在するものによって構成される。こうした可能世界に関する見解の相違に応じて、「具体的対象が存在しな

い世界」が可能世界のひとつであるかという問いに対する答えは異なるものになる。この対応関係について、ここではコギンズの分類を取り上げたい。コギンズは「具体的対象が存在しない可能世界」を可能世界のひとつとして認められるか否かという点から可能世界に関する理解の観点を次の３つに分類する。すなわち、世界の「合成的観点（compositional view）」「「容器」的観点（'container' view）」「代替的観点（ersatz view）」である[13]。

可能世界について合成的観点をとる可能世界論は、世界を個々の内容から合成された（composed）ものとして理解する。したがって、この観点のもとでは、世界は個々の内容の存在なしには成立せず、具体的対象が存在しない可能世界は成立しない。この観点をとる可能世界論として、コギンズはルイスの様相実在論（Modal Realism）とアームストロングの組み合わせ主義（Combinatorialism）を挙げている[14]。ルイスはあらゆる可能世界が現実世界と同様にそれぞれ具体的に独立して存在すると考える。ルイスの様相実在論において可能世界とは「時空的に相互に関係する事物の最も大きいメレオロジー的な和」である[15]。したがって、可能世界を構成する具体的対象が存在しないことは、可能世界そのものが存在しないことと同じであり、ルイスは「具体的対象が存在しない世界」が可能世界であることを認めていない[16]。

可能性に関する組み合わせ主義を主張するアームストロングもまた、空虚な可能世界の存在を否定する[17]。アームストロングは、可能世界が具体的に存在するというルイスの想定を認めない現実主義の立場をとり、現実世界の個物、性質、関係を実際とは異なる仕方で組み合わせることで可能性を説明する。したがって、アームストロングは可能世界についてルイスとは異なる立場に立つものの、組み合わせの要素がない場合は構成される世界も存在しないため、ルイスと同様、空虚な世界を認めていない。

ルイスやアームストロングのような合成的観点に対して、容器的観点　から可能世界を考えた場合、可能世界は個々の内容から合成される（composed of）のではなく、それらを含む（contain）容器のようなものであり、内容とは別個の対象と考えられる[18]。この容器的観点によれば、世界それ自体は、その世界に含まれる対象には含まれない。すなわち、容器は容器の内容とは明確に区別される。一見すると、この場合は引き算論証の最後の段階において世界そのものは残り、空虚な世界が成立するように思われる。しかし、中身の存在に依存しない容器としての世界が実質的には何なのか、

そして、引き算の最後の手続きにおいて本当にそれは取り除かれないのかという点について困難が残る[19]。

合成的観点、容器的観点のいずれも「具体的対象が存在しない可能世界」を認めることができないと考えられるのに対して、代替的観点から可能世界を考えた場合、そのような空虚な世界を認めることができる。コギンズは、可能世界を「事物がそのようでありえた極大無矛盾な仕方」とする見方を世界の代替的観点と呼ぶ[20]。この場合の世界は具体的対象から合成されたものではない。世界は、その世界におけるすべての事柄の真偽を決定するような極大事態や命題の集合である。コギンズがこの代替的観点の例として挙げているのがプランティンガとボールドウィンの立場である。プランティンガは、アームストロングと同様に現実主義の立場をとり、可能世界を「可能な極大事態」と考える[21]。しかし、アームストロングがこの極大事態を現実世界の具体的な要素の組み合わせとするのに対し、プランティンガはもしその世界が現実であるなら成立しているはずの事態をすべて決定するものとして世界を扱うという点で異なる。ボールドウィンも同様に、ルイスの可能主義をとらず、また、現実世界の具体的な個物、性質、関係それぞれをそのまま組み合わせるのではなく、それらの表象（representation）を代替者として用いることによって可能性を説明する[22]。コギンズによれば、この代替的観点では世界は、世界のあり方を決定するようなルールのようなものであり、この場合にのみ、「具体的対象が存在しない世界」を可能世界とみなすことができる[23]。例えば、代替的観点に分類されるプランティンガの立場をとるならば、ある可能世界において具体的対象が全く存在しないとしても、その世界は矛盾を含まないひとつの可能な事態としてこの現実世界の中で認められるからである。すなわち、この代替的観点では、世界そのものの存在を世界の中身の存在から独立に問題にすることができるのである。以上の分類からコギンズは、「具体的対象が存在しない世界」を可能世界のひとつとして認めること、すなわち形而上学的ニヒリズムの立場をとる場合、可能世界については代替的観点をとらなければならないと考える。

コギンズは引き算論法そのものの欠陥を指摘しており、最終的には代替的観点をとったとしても現実世界から空虚な世界への到達可能性は保証されず、現実世界において無は不可能であるという結論を出している[24]。そして、この結論から、コギンズは「何かが存在する」ことは必然的であって、このことは「根本の問い」に対する決

定的な答えとなるとしている。しかし、ここでコギンズが「無」と呼んでいるのは、「具体的対象が存在しない可能世界」のことである。では、そもそも「根本の問い」を考えるにあたって、このような想定は適切であるのだろうか。

3. 無は「具体的対象が存在しない可能世界」か？

形而上学的ニヒリズムをめぐる議論では、「具体的対象が存在しない可能世界」が存在し、現実世界からその世界へと到達可能かという問いを論じることによって「無が可能か」という問いに答えようとする。しかし、この二つの問いは全く一致したものといえるだろうか。というのも、この二つの問いを同じものとみなしてしまうと見えなくなってしまうような無の理解があるからである。そこで、本節では、最初にハイルの主張を参照し、そうした無の理解を示したい。

ハイルの「根本の問い」対する答えは、「他の選択肢がないから」というものである。ここでの「他の選択肢」とは無のことである。ハイルによれば、「もし何かが存在するならば無ではありえなかった」(25)。「根本の問い」について、可能世界という概念を背景に議論すること自体に批判的な立場をとるハイルは、引き算論証の前提の正当性や形而上学的ニヒリズムと可能世界の定義との整合性を問題としていない。その代わりに、ハイルはわれわれが「根本の問い」を問題にする際に無という語でイメージしやすい他の事柄、すなわち、「神がとりえた選択肢の一つ」「空虚な空間（empty space）」「ビッグバンに先行する事柄（the precursor to the Big Bang）」と本来考察されるべき無との違いを明らかにすることによって「根本の問い」を考察する(26)。以下ではハイルが提示するこれら三つの点から確認する。

まず、「根本の問い」を問題にする際に「神があるもの（a something）を創造するかどうかを決定する」という伝統的なイメージを持ち出すことはできない。なぜなら、創造に先行する神もまた「あるもの（a something）」だからである。そのため、「あるもの」と無のいずれかを神が選択するという場面を想定することはできず、神が選択していたかもしれない無というイメージを維持することは困難であるとハイルは述べる。

次に、ハイルによれば、無は「空虚な空間」ではない。すなわち、宇宙を構成しているものをすべて差し引くことが可能であるとしても、そのような操作によって残るのは、「空虚な空間」であって、無ではない。「空虚な空間」も「あるもの」である。

ハイルが「根本の問い」において問題にされるべきだと考える無をハイルの言葉使いにしたがって「全くの無（nothing at all）」と呼ぶならば、「全くの無」は、現実にあるものを差し引くことによって得られるものではない。そうした操作が可能であるように思われるのは、「全くの無」が「空虚な空間」と混同されているからである。

最後に「全くの無」は「ビッグバンに先行する事柄」ではない。ビッグバンは空虚な空間、あるいは空間そのものもないような何らかの状態から生じたと説明されるかもしれない。しかし、それら「ビッグバンに先行する事柄」は「全くの無」と同じではない。というのも「全くの無」は「あるもの」に変化するような起点となるものを一切提供しないからである。

以上のように、根本の問いにおいて無として想像されやすい「神の選択肢のひとつ」「空虚な空間」「ビッグバンに先行する事柄」といったものは、特殊な「在り方」のひとつであって「全くの無」ではない。無をこのように区別するとき、「根本の問い」における「何もない」を、「全くの無」とするか、実際には「あるもの」に含まれるような無とするかによって、この問いの意味と解答可能性は異なるものとなる。

> 「なぜ何かがあるのか」「なぜあるものがあって何もないのではないのか」という問いは当の無が実際にはあるもの（a something）、すなわち、空虚な空間、真空、ビッグバンに先行する事柄であるような場合にのみ意味をなす。（中略）このように考えるとき［無が実際には「あるもの」のように考えられる場合］、ひょっとしたらわれわれはビッグバンに先行する事柄に接近する方法をもたないためにその答えを発見することができないのかもしれないが、そうだとしても、この問いには答えることが可能であると考えられる。それに対して、もし無が絶対的な存在の欠如として考えられるなら、その問いは扱うことさえできない。（27）

「根本の問い」における無が「あるもの」「あり方のひとつ」としての無であるならば、この問いは意味をもち解答可能である。すなわち、どのようにして「ビッグバンに先行する事柄」からわれわれが知るような宇宙が生じたかについての説明を与えることはできるかもしれない。しかし、この問いにおける無が、絶対的な存在の欠如、すなわち、「全くの無」であるならば、この問いにはもともと答えがない。

そもそも「なぜあるものがあって、何もないのではないのか」という問いは、それ

が何であれ「何かがある」ということを前提に、その根拠が問われている。しかし、「何かがある」ならば、「全く何もない」ということは不可能である。なぜなら、「全く何もない」という可能性は「空虚な空間」とは異なり、「あるもの」から何かを差し引くことによって可能となるようなものではないからである。

また、「全くの無」から「あるもの」が生じることもありえない。なぜなら、「全くの無」は「あるもの」に移るための資源となるものを全くもたないからである。すなわち、もし「全く何もない」ならば、「何かがある」は不可能である。「全くの無」は、「ビッグバンに先行する事柄」のような「何かがある」ようになる前のひとつの過程ではない。そのような過程もまた「あるもの」だからである。よって、「あるもの」と「全くの無」は全く相容れない可能性である。そして、これら二つの可能性に先立って一方から他方への移行を説明するような何らかの根拠を想定することも不可能である。というのも、その根拠も何であれやはり「あるもの」であるからである。

「なぜそもそもあるものがあって何もないのではないのか」という問いは、その問いの前提である「あるものがある」という事実が、すでに「全く何もない」が不可能であることを明らかにしている。したがって、この問いは問いとして成立していない。もし、あえてこの問いを意味ある問いとみなし、答えを与えるとすれば、「他に選択肢がないから」となる。

以上のように、ハイルは「全くの無」と実際には「あるもの」に含まれるような無とを区別することによって、「なぜあるものがあって何もないのではないのか」という問いを解答不可能な問いと解答可能な問いに区別する。そして、「根本の問い」は、その問いの根本的な性格のために、後者の無ではなく前者の「全くの無」を問題にしていると考えられるのである[28]。

ハイルの一連の主張が、「全くの無」という概念に依拠していることは明らかである。ハイルは、「もし「全く何もない」ならば「あるものがある」ということは不可能である」という想定まで提示して「全く何もない」という可能性に言及している。では、この可能性はどのような可能性であるのか。それは可能世界のひとつとして扱うことができるような可能性であるのだろうか。

コギンズによれば、２節で確認した可能世界についての代替的観点をとれば、具体的対象だけでなく抽象的対象も存在しないような可能世界さえ認めることができる[29]。というのも、そのような世界はいかなる対象ももたないが、量化される可能世界

そのものは現実世界において存在する命題、事態、表象のような代替者であるため、ある可能世界に対象が存在するかどうかということとその可能世界が量化の対象となるかどうかということとは直接には関係ないからである。そこで、可能世界についての代替的観点のもとで、「抽象的対象も具体的対象も一切存在しない可能世界」が存在し、かつ、その世界と現実世界が相互に到達不可能であるならば[30]、それはハイルが指摘するような「全くの無」と「あるもの」とが相互に相容れない可能性であるという関係に対応していると考えられるかもしれない。

しかし、こうした可能世界という概念による置き換え、すなわち、「全くの無」を「抽象的対象も具体的対象も存在しない可能世界」とする説明には次のような問題点が考えられる。まず、代替者である事態、命題、表象といった概念が「全くの無」という事柄と両立するかという点が挙げられる。前述したように、「全くの無」と「あるもの」はそれぞれ全く相容れない可能性である。そのため、「全くの無」という可能性を何かが存在する可能性に置き換えることはできない。よって、もし代替者が何らかの在り方、存在する可能性のみを問題にするものであるなら、代替者によって「全くの無」を問題にすることはできない。また、もし代替者が「全くの無」を問題にすることができたとしても、それが量化の対象となれば、「全くの無」と「あるもの」としての無の区別は、かえって不明確になるように思われる。いずれにせよ「全くの無」と「あるもの」としての無にハイルが与えた以上の概念上の区別を可能世界論によって明らかにすることはできないのではないだろうか。

本稿ではこれらの問題点に対する最終的な解答を与えることはできない。しかし、これらの問題点が解決されていない以上、「全くの無」としての無を可能世界のひとつと考えるべきではない。すでに述べたように、それを可能世界のひとつとすることで、ハイルが「あるもの」と区別するような「全くの無」の固有の意味が見えなくなるからである。もちろん、そもそも「全くの無」という無に関する理解や表現がどのように正当化されるのかについてはさらに議論が必要である[31]。このような無という概念の正当性については稿を改めて検討したい。

註

(1) Leibniz(1967), 邦訳 p.94。 本稿が「なぜあるものがあって何もないのではないのか」という問いを「根本の問い」と呼ぶのは、ボールドウィンに従っている（Baldwin(1996), p.231）。また、本稿では「何もない」と「無」を区別せずに用いる。

(2) 本稿が言及するハイルの論文も掲載されている『存在の謎（The puzzle of existence）』というタイトルの論文集が 2013 年に発刊され、ロドリゲス・ペレイラやジョナサン・ロウなどの分析的形而上学を代表する研究者が形而上学的ニヒリズムを含むこの問いに関連するトピックを扱っている。

(3) この主張を表すために、ボールドウィンはもともと「ニヒリズム」という語を用いていたが、その後ロウが他の「ニヒリズム」の用法からから区別するために「形而上学的ニヒリズム」という言葉を導入した。（Lowe(2002), p.62）

(4) 飯田(1985), p. 277

(5) インワーゲンによれば、「根本の問い」によって問題にされている存在（being）とは机や椅子のような具体的対象の存在であり、「具体的対象が存在しない可能世界」、数や集合といった抽象的対象のみから構成される可能世界は「無」とみなされる。van Inwagen(1996), p.95（邦訳 pp.57-58）

(6) Lowe(1996), p.115

(7) Baldwin(1996), p.232

(8) Coggins(2012), p.7

(9) Baldwin(1996), pp.232-233

(10) Ibid., p.232

(11) Coggins(2012), p.144 (Note3. 4.)

(12) 飯田(1985), p. 275

(13) Coggins(2012), p.27

(14) Ibid., p.28

(15) Lewis(1986), p.69

(16) Ibid., pp.73-74

(17) Coggins(2012), pp.28-29

(18) Ibid., p.31

(19) Ibid., p.32 ここでコギンズが容器の候補として挙げているのが時間と空間である。しかし、

時間と空間を容器とみなす場合、それは時間と空間の絶対説の立場をとることになり、一般的に擁護するのが難しいとコギンズは指摘している。またコギンズは何かを含むような容器として基本的には具体的なものを考えており、ここでも合成的観点と同様の問題、つまり、引き算の最後のステップにおいて「世界そのもの」も取り除かれてしまうという問題が残るとコギンズは指摘する。

(20) Ibid., p.35

(21) Ibid., p.35

(22) Baldwin(2001), p141

(23) Coggins(2012), p.37

(24) Ibid., p.137

(25) Heil(2013), p.180

(26) Ibid., p.174-176

(27) Ibid., pp.175-176 ［ ］内引用者。

(28) Ibid., p.180

(29) Coggins(2012), p. 99 コギンズは、代替的観点では「いかなる抽象的対象も具体的対象も存在しない」という命題が、その命題そのものを含まない世界で真になると述べ、写真が全くない部屋を写す写真に例えている。

(30) 到達可能性関係が反射的かつ推移的かつ対称的であるような場合であっても、必ずしもどの二つの可能世界も相互に到達可能になるとは限らない。徳本（2013）p.104 を参照。

(31) ハイルに先行して、分析的形而上学とは異なる文脈ではあるが、松井吉康は 2007 年以降の論文で「端的な無」という概念を提示している。これはハイルの「全くの無」に相当するものと考えられるが、ハイルが触れていない点として、例えば、無という概念の正当性や、何が第一の問いかという点に松井は言及している。松井によれば、「端的な無」が可能であるのは、それが矛盾を生じさせるような複数の要素をもたないからである。すなわち、「端的な無」は論理的には可能である。しかし、現実には「無ではない」のであり、「端的な無」は不可能である。「端的な無」と「無ではない」は相互に相容れない可能性であり、あらゆる問いの中でも究極の問いは「端的な無」という可能性に関する問い、すなわち、「まったく何もないのか」であると松井は述べている。例えば、松井（2014）p. 22 を参照。

参考文献

Baldwin, T. (1996). “There Might Be Nothing”, *Analysis* 56 (4), pp.231-238

————. (2001). *Contemporary Philosophy: Philosophy in English since 1945*. Oxford, Clarendon Press.

Coggins, G. (2010). *Could There Have Been Nothing? Against Metaphysical Nihilism*, Palgrace Macmillan.

Heil, J. (2013). “Contingency.” *The Puzzle of Existence: Why Is There Something Rather Than Nothing?*. ed. Tyron Goldschmidt. Routledge. 2013, pp.167-181

Leibniz, G. W. (1967), “De rerum origination radicali”, 邦訳：「事物の根源的起源について」（米山優訳）『ライプニッツ著作集 ８ 前期哲学』、工作舎、1990 年、pp.91-102）

Lewis, D. (1986). *On the Plurality of Worlds*. Blackwell Publishing.

Lowe, E. J. (1996). “Why Is There Anything at All? :II.” *Aristotelian Society Supplementary Volume*, Vol70, pp.110-120.

————. (2002). ‘Metaphysical nihilism and the subtraction argument’ *Analysis* 62, 62-73

Plantinga, A. (1979). “Actualism and Possible Worlds”, The Possible and the Actual, edited by Loux, M. J. London, Cornell University Press.

Rescher, Nicholas. (1984). “On Explaining Existence (Real Possibility as the key to Actuality)”, Metaphysics: Contemporary Readings. Ed. Steven D. Hales. Wadsworth. 1999, pp.7-25

van Inwagen, P. (1996). “Why is There Anything at All?”, *Proceedings of the Aristotelian Society. Vol. 70*, pp.95-110

（邦訳：「そもそもなぜ何かがあるのか」（青山拓央、柏端達也、谷川卓訳）『現代形而上学論文集』、勁草書房、2006 年、pp.57-84）

秋葉剛史、倉田剛、鈴木生郎、谷川卓『現代形而上学　分析哲学が問う、人・因果・存在の謎』、新曜社、2014 年

飯田隆（1985）「可能世界」『新・岩波講座　哲学７　トポス　空間　時間』、岩波書店、pp.270-300

———（1995）『言語哲学大全Ⅲ　意味と様相（下）』、勁草書房。

松井吉康　（2008）「無と存在」『文明と哲学』（1）、日独文化研究所、pp.153-163

————（2009）「存在の呪縛」『思想』(1025)、岩波書店、pp.141-157

（Matsui, Y. (2007) “Der Bann des Seins” Philosophiches Jahrbuch 114. Jahrgang / 2）

――――（2012）「『思索の事柄』と『無』」電子ジャーナル『Heidegger-Forum』Vol. 6.
――――（2014）「日本語で哲学すること：存在を問うために」『人間文化』（34）、神戸学院大学人文学会、pp. 21-27
三浦俊彦（1997）『可能世界の哲学–「存在」と「自己」を考える』、日本放送出版会
――――（2000）『論理学入門』，日本放送出版会
八木沢敬（2014）『神から可能世界へ　分析哲学入門・上級編』、講談社

(本学人文学研究科博士後期課程)